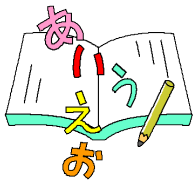
令和7年度全国学力学習状況調査結果概要

今年度も全国学力学習状況調査が実施されました。この結果は児童の学力の全てを把握するものではなく学力の特定の一部を示しているものですが、これを分析して成果と課題を明確にし、今後の学習活動や生活の改善に活かしていくことが重要であると考えています。以下に本校の調査結果の概要を示します。



【国語】

- 本校の平均正答率は奈良県や全国の平均を上回っており、生駒市の平均とほぼ同じでした。
- ほぼ全ての設問で平均正答率を上回っており、国語の力が身についている児童が多いことがわかります。
- 正答率が県や全国の平均よりも低くなっていた問題から、今後は「目的や意図に沿って、複数の語句を丸や四角で囲んだり、語句と語句を線でつないだりするなど図示することによって自分なりに情報を整理できるようにすること」や「書き手がどのような事実を理由や事例として挙げているかを書き出し、書き手の考えを自分の言葉で短くまとめるなどして、内容の中心と事柄などをとらえることができるようすること」の指導が必要であると考えます。
- 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つける問題の正答率は全国的に低くなっていました。文章中に用いられている図表などが文章のどの部分と結びつくのかを明らかにしたり、文章と図表などの関係をとらえて読んだりすることで、内容についてより深く理解したり解釈したりすることができるように指導を進めていきます。
- アンケートでは、国語の勉強が得意な児童は54．2%でしたが、国語の勉強が好きな児童は61%、国語の授業の内容がよくわかる児童は84．7%でした。各学級では児童の国語力に合わせた分かりやすい授業に努めており、これらの積み重ねの成果が児童の学力として表れてきていると考えます。今後も基礎基本の学習を大切にしながら児童の実態に合わせた分かりやすい授業を工夫していきます。

【算数】

- 本校の平均正答率は奈良県や全国の平均を上回っていました。
- ほぼ全ての設問で平均正答率を上回っており、算数の力が身についいている児童が多いことが分かります。
- 基本図形に分割することができる図形（五角形を三角形と台形に分割したり、ひし形と三角形に分割したりする）の面積の求め方を式や言葉を用いて記述する問題は全国的にも正答率が低く、本校の正答率も31%でした。
- 日常の事象について伴って変わる二つの数量の関係に着目して考察する問題（ハンドソープを何プッシュしたら空になるかを計算したり、計算するためには何の数値が必要かを答えたりする問題）は全体的に正答率が低くなっていました。授業の中で、複数の情報から状況に応じて必要な数量を見

出し、それらの関係を式や言葉の式に表現できるよう指導を進めます。

- アンケートでは、算数の勉強が得意な児童は61%、算数の勉強が好きな児童は57．6%、算数の授業の内容がよくわかる児童は76．3%でした。引き続き ICT 機器を活用し楽しい授業・分かる授業の工夫に努めるとともに作業的・体験的な活動を工夫しながら理解を深める授業を展開していきます。

【理科】

- 本校の平均正答率は奈良県や全国の平均を上回っており、生駒市の平均と同じでした。
- アンケートでは理科の勉強が得意な児童は83．1%、理科の勉強が好きな児童は86．4%、理科の授業の内容がよくわかる児童は94．9%でした。国語や算数と比較して肯定的な回答をした児童が多く、理科に興味をもって楽しく学習している児童が多くいることがわかります。
- 具体的な内容では、身の回りの金属についての問題（電気を通すかどうか・磁石に引き付けられるかどうか）、花のつくりや受粉に関する問題、水の温まり方に関する問題の正答率が少し低くなっていました。
- 理科の学習では、観察や実験をよく行ったり問題に対して自分で予想を考え、観察や実験結果からどんなことが分かったのか考えたりする活動を多く取り入れています。理科の学習においても身につけた力を生活や様々な学習の場面で活用できるようにすることによって、児童にとって学習が意味のあるものとなり学習することの意味を、実感を伴って味わうことができるようにしていきます。

【学習状況（学習意欲・方法・環境・生活等）】

- 家庭学習の時間は平日・休日はともに61%の児童が「1時間以上取り組んでいる」と回答し、全国や県の平均よりも高くなっていました。（本校の例年の数値と比較しても家庭学習に取り組んでいる児童の割合が高くなっていました。）家庭学習の習慣づけができ、自主的に学習をする態度を身につけている児童が多くいることが分かりました。
- 読書に関する項目では42．4%の児童が「普段30分以上読書をする」と回答しました。読書の習慣を身につけている児童も多くいることが分かりました。
- 90%以上の児童が PC やタブレットを使って「文章を作成する」「情報を調べる」「学校のプレゼンテーションを作成する」ことができると回答しました。これまで様々な場面で ICT 機器を積極的に活用してきたことにより、児童はタブレットを日常の文房具として活用する力を身につけてきているといえます。
- 「いじめはどんな理由があってもいけないことだ」の問いに対して96．7%の児童が肯定的な回答をしました。引き続き「いじめ防止基本方針」に沿って、いじめを許さない心の育成に努めていきます。
- 「自分にはよいところがある」に84．7%の児童が肯定的な回答をしましたが県や全国の平均値より少し低くなっています。自尊感情や自己有用感が低いことは全国的にも課題となっている事象です。学校生活の様々な場面で児童が自分の役割を果たし満足感や達成感を得られる機会、グループ活動の中で自他のよさを認め合いながら主体的に取り組む機会などを設け、自尊感情や自己有用感を育む取組をすすめていきたいと考えます。